

17世紀ポトシにおけるビクーニャスとバスコンガドスの戦い (1622～1625年)の社会経済的背景

—バスク人の動向を中心に—

真 鍋 周 三

はじめに

16世紀以降、多くのスペイン人が新大陸に移り住んだ。出身地別にみると、アンダルシア人が首位の座を占め、これにカスティーリャ人、エストレマドゥーラ人、バスク人、ガリシア人などが続く。彼らはいずれもが都市で生活することを望み、都市自治体に邸宅を構え、カビルド(cabildo.市参事会)に議席をもち、文化的な生活を送ることをめざした。スペイン国王に対しては不変の忠誠心をもって行動した。これに対してヨコの関係すなわちスペイン人同士の場合は、同郷出身者間では一般的に結束がみられたけれども、異郷出身者間では争いがよく起きた。とりわけ各都市のカビルドに集ったスペイン人事業主などから構成されるレヒドール(regidores.市参事会員)の間では権力欲や思惑がうごめいており、いろいろと問題が発生した。毎年1月1日には2名のアルカルデ(alcaldes ordinarios.市長)が選出されたが、そうしたおりに党派間の争いが表面化した。とくにポトシ市のごとく、巨大な富が動く現場ではなおさらのことであった¹。

ポトシは銀発見当初から人々を魅了し、多くの人々を引きつけた。4000メートルを超え

¹ フランシスコ・デ・ソラーノ(篠原愛人訳)「スペイン人コンキスタドール—その特徴」『大航海の時代 スペインと新大陸』(関哲行、立石博高編訳)、同文館、1998年、243-250頁、258-259頁。高橋均「植民地ペルー、アレキパ地方のブドウ酒生産 (I) —その発足の背景と経緯、労働力調達—」『経済学季報』(立正大学)第40巻第1号、1990年7月、110頁。John Preston Moore, *The cabildo in Peru under the Hapsburgs: A study in the Origins and Powers of the Town Council in the Viceroyalty of Peru 1530-1700* (Durham: Duke University Press, 1954), pp.78-79, p.81. 新大陸のカビルド一般についてみると、1517年にスペイン王室は植民者がカビルドのアルカルデを選出することを認めた。カビルドは都市の政治・行政権、第1審級の民事・刑事訴訟の裁判権を有し、都市の運営を調整する法規を決めた。つまり、市場、生活必需品、同業組合、市民税、防衛、公共秩序など都市生活を定めた事柄である。カビルドは、時代、環境、市の等級に応じて不確定な数の任務を擁した。副王など上級権力によって裁可され、アルカルデやレヒドールによって運営された。アルカルデは市の財政や運営の事項を決定し、また第1審級の判事として職務を果たした。執行官(alguacil)は裁判の判決を執行し、市の秩序や良俗を維持する役目を有した。王党軍少尉(alférez real)はアルカルデの代理を務めたほか、市の民兵部隊の儀式や指揮のさいに軍旗を運んだ。書記(escribano)は審議のさいには発言も投票もしなかったけれども、決議のさいに公的信用を担保した。文書保管人でもあった。他にもいろいろな役目を担うレヒドールたち(4人から24人まで)がいた。彼らは市の行政職を担っていた。スペイン本国のカビルドに準じていた。カビルドの役職の大半は(売官制ゆえに)王権の収入源であった。いくつかの町では伝統が優先されたり腐敗が横行し、アルカルデを終身や世襲の存在に変えていた。数十年が経つにつれて、カビルドの役職はクリオーリョによって獲得された。市の行政は新大陸生まれのスペイン人によって支配されるようになった。José M. González Ochoa, *Atlas histórico de la América del descubrimiento* (Madrid: Acento Editorial, 2004), pp.244-245.

る寒冷で不毛の場所に、世界でも屈指の大都会のひとつを生み出した。第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレド(Francisco de Toledo, V Virrey.在位1569-81)在任中の1575年には最初のカサ・デ・モネダ (la Primera Casa de Moneda.造幣局) が設置され、貨幣の鋳造も始まった²。17世紀の初め(1611年)には16万人もの人口を擁した³。ポトシの町(第1図参照)の繁栄ぶりは未曾有のものであった。

1570年代後半以降、ポトシの銀鋳業が「私企業(もしくは私人)とスペイン王権による官民混合事業」となったことは、既に別稿で指摘した⁴。この「私企業」のうち「バスク人集団 (la “nación” vasca o colectividad vasca)」⁵の存在は重要である。バスク人集団は16世紀半ばにはすでに形成されていたといわれている。17世紀前半に起きた市民戦争の主役を彼らは担った。

新大陸へのバスク人移民は16世紀からはじまる。移民を決意した人々は渡航費用を調達し、親族や同郷者とともに移民団を結成してセビーリャに向かい、インディアス通商院 (Casa de Contratación) から渡航許可証の発給をうけた。新大陸に到着すると、親族や同郷者が入植・定住している地域に向かった。そこでは援助が期待でき、成功の可能性が高かったからである。強固な親族関係、同郷意識が移民を支え、パトロン＝クライアント関係(恩顧＝庇護関係)や信徒会、ギルドを通じて社会的紐帯を構成した。移民は故郷にいる親族との関係を保ち、大西洋を越えた親族ネットワークを形成した。16世紀以降、バスク

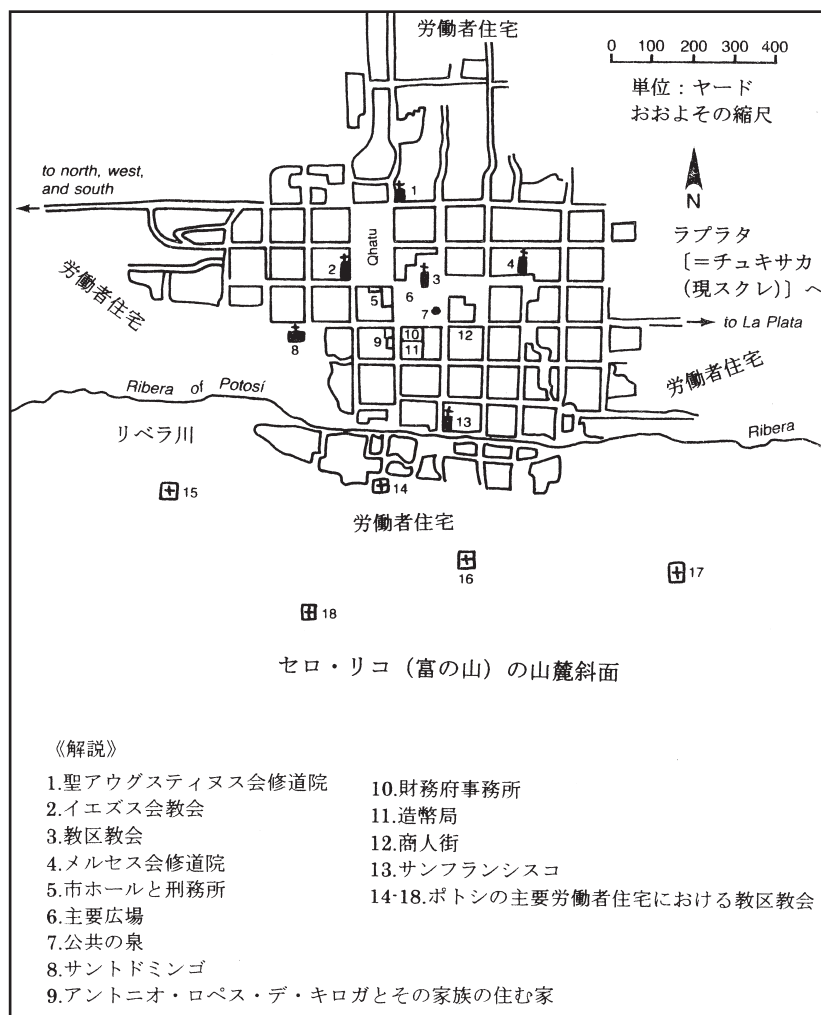
² カサ・デ・モネダの建設と貨幣の鋳造について。1568年、リマのアウディエンシア議長ロペ・ガルシア・デ・カストロ (Lope García de Castro. 在位 1564-69) は、鋳山主や商人からの要請をうけて、国王フェリペ2世にカサ・デ・モネダの設置を申請した。1572年、副王トレド (副王トレドが巡察のためポトシを訪問したのは1572年12月のこと) によって最初のカサ・デ・モネダ建設が命じられ、その建設が始まった。建設地はレゴシホ広場の南側、マトリス教会 (大聖堂) に面した、75平方バラ (約63平方 μ) の場所であった。1575年に完成。と同時に貨幣の鋳造が始まった。Wilson Mendieta Pacheco, *La acuñación de monedas en Potosí* (La Paz: Cima, 1995), p.3, p.5, pp.12-13.

³ 経済史学者デニス・フリンは、「17世紀初めのポトシの人口は当時のロンドンやパリの人口と同じか、もしくはそれを凌いだ」と述べている。

⁴ 拙稿、「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究—ポトシ市場経済圏の形成—(後編)」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、No.12、京都外国語大学、2012年、15頁。ポトシにおける王権 (国庫) の主な収入源としては、銀「5分の1税 (quinto real)」の徴収、ミタの割り当てや水銀販売収入 (後述のように「負債 (deudas)」の形式をとった)、カピルドの「レヒドール」や「コレヒドール (corregidor. 地方行政官)」をはじめとするさまざまな官職販売収入、販売税 (alcabala) ほか各種税金である。

⁵ 当時、ナシオン (nación) という言葉はたえず「集団 (colectividad)」の意味で用いられていた。例えば、原住民集団 (nación india)、カステイーリャ人集団 (nación castellana)、クリオーリヨ集団 (nación criolla)、エストレマドゥーラ人集団 (nación extremeña) といった表現である。バスク人集団 (colectividad vasca) を扱う場合、バスク人集団 (nación vascongada)、ビスカヤ人集団 (nación viscaína)、さらに文化的なレベルではカンタブリカ人集団 (nación cantábrica) などの表現が浮上する。Alvarez-Gila, Oscar et al. (ed.), *Emigración y redes sociales de los vascos en América* (Vitoria, 1996). バスク人の集団とは、(一般的には) 現在の地域名で言うとアラバ (Álava)、ビスカヤ (Vizcaya)、ギブスコア (Guipúzcoa) 県 (provincias) 出身の人々の集まりをさす。なおここでいう「バスク人」とは、「スペイン・バスク地方生まれのスペイン人もしくはその子孫 (クリオーリヨ)」をさす。またスペインにおいてバスク地方はカタルーニャ地域やガリシア地域とともに少数言語・少数民族地域であり、地域ナショナリズムが台頭し展開されてきた特異な地域である。EU 統合下の現代スペインにおいてもバスク地域では「スペイン」への帰属意識はわりあい低い。地域の民族的多様性はスペインがかかえる特殊性である。兵庫県立大学 EU 研究会における拙報告「スペインの地域と国家—バスク・ナショナリズムの台頭とその変容をめぐる—」(2006年2月)。

第1図 17世紀ポトシ市の市街図



出所：拙稿「描民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究—ポトシ市場経済圏の形成—(後編)『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、No.12, 京都外国語大学, 2012年, 4頁。

人商人がアメリカ貿易に従事したことが知られている。とはいえ、当時のセビーリャ商業社会ではバスク人は「よそ者」とみなされた。しかし、16、17世紀のアメリカ貿易に使用された帆船を建造していたのは主にバスク地方やカンタブリア地方の造船所であった⁶。ま

⁶ 関哲行、立石博高編訳『大航海の時代 ス페인と新大陸』（同文館、2000年）、21頁、25頁。ルース・バイク「16世紀におけるセビーリャ貴族と新世界貿易」（同上書）、154-155頁、ローレンス・A・クレイトン（合田昌史訳）「船と帝国—スペインの場合」（同上書）、180-182頁、ソラーノ前掲論文の第2節「コンキスタドール—人数、年齢層、出身地」（242-248頁）は当時のバスク人の状況を知るうえで示唆に富む。また新大陸におけるコンキスタドールズについては、Tello Mañueco Baranda, *Diccionario del nuevo mundo, todos los conquistadores* (Valladolid: AMBITO Ediciones, 2006), p.343. に出身地別にその名前が詳しく記されている。その内訳は、アンダルシア人33人、カスティリーヤ人33人、エストレマドゥーラ人31人、バスク人19人である。

たバスク地方は鉄の一大産地であり、バスク人はこの鉄を新大陸にもたらすことで経済力を蓄えた⁷。

バスク人はポトシの鉱脈や精錬所の多くを所有し、莫大な利益を手にした。1570年代後半以降になると銀の抽出には水銀 (azogue、mercurio) が必要とされた。ワンカベリカ水銀鉱山 (las minas de Huancavelica) はスペイン王権が収容しており、水銀はスペイン国家によって独占・所有された⁸。ポトシの精錬業者は水銀の調達費をすぐには支払えなかったため、王権は精錬業者に水銀を掛け売りすることにした。銀の精錬業者はポトシ財務府 [la Real Caja .「財務府三役」により運営・維持された。「財務府三役」とは、会計官 (contador)、財務官 (tesorero)、検察官 (factor) を指す] から水銀を掛け売りしてもらった。すなわち王権による「負債 (deudas)」の供与である。王権は「5分の1税 (銀生産量全体の5分の1。20%)」を徴収したほか、この「負債」を「分割払い」の形で決済・徴収することにした。王権側からみると「貸し付け (信用貸し・掛け売り) (préstamo、crédito)」であり、精錬業者側からみると「借入れ (endeudamiento)」である⁹。

スペイン王権は「5分の1税」の徴収をはじめ、水銀の独占販売、さまざまな役職や官職 (公職) 販売、ミタ労働者の割り当て、鉱山の賃貸し、販売税 (alcabala) の徴収などを通じて国庫を増やした。バスク人は王権と結びつくことで、莫大な富を手に入れた。バスク人は本国において鉄鉱業の経験を積んでおり、ポトシでは銀鉱業の基礎を築く¹⁰。

ポトシ市の公職 [los cargos públicos municipales (“oficios”)]¹¹ は王権によって高額で販売されたが、その額は富裕者のみが支払いうる金額であった。そこで、ポトシにおいては富裕なバスク人がカビルド等の役職を独占する状況が生まれた。彼らは政治権力を利用して銀鉱業を有利に進めた。

17世紀に入ると、バスク人集団と他のスペイン人集団との間で社会的緊張が高まった。両者の関係は1618年になって急激に悪化した。1618年は「負債」総額を検査するために、王権 [リマ会計審査会 (el Tribunal de Cuentas de Los Reyes)] の会計検査官アロンソ・マルティネス・パストラナ (el contador real Alonso Martinez Pastrana. 視察官としての在任期間は1618年8月から1623年半ばまで。非バスク人) が第12代ペルー副王エスキラチェ公 (Francisco de Borja y Aragón, príncipe de Esquilache, XII Virrey. 在位1615-21) の命

⁷ 狩野美智子『バスク物語—地図にない国の人びと—』(彩流社、1992年)、164頁。

⁸ ワンカベリカ水銀鉱山の収容と水銀の独占は、第5代ペルー副王トレド (Francisco de Toledo, V Virrey. 在位1569-81) による。フェリペ2世の時代 (el rey Felipe II. 在位1556-98) である。拙稿 (2012年)、5-8頁参照。ワンカベリカ産の水銀はポトシに最優先的に提供された。

⁹ こうした「負債 (deudas)」の供与は、後述するように、ポトシ鉱山業の歴史にたいへん深刻な問題を残すことになる。Alberto Crespo R., *La guerra entre vicuñas y vascongados, Potosí 1622-1625* (Sucre: Universidad Andina Simón Bolívar, 1997), P.41.

¹⁰ *Ibid.*, pp.31-32.

¹¹ ポトシの「公職」としては、「財務府三役」、「カビルドの役職者 (アルカルデ、レヒドールなど)」、「カサ・デ・モネダの役人」、「コレヒドール」等があった。

を受けてポトシ財務府に派遣され、調査に乗り出した年である¹²。カビルドのメンバーは大半が鉱山業者であり、水銀購入においてかなりな額の「負債」を王権に対して負っていた。だが、何故かその記載が「負債」帳簿からしばしば漏れており、「負債」額の支払いが大幅に滞っていた。会計検査官は、該当するレヒドールに対してその役職停止処分を決断する。関係者はこれに抗議した。他方、市中ではバスク人に対する反感が高まっており、彼らを役職から解任せよとの声があがっていた。当時カビルドを構成していたレヒドールは24名¹³〔全員がスペイン人もしくはスペイン系白人（クリオーリョ）〕であり、その内訳はバスク人と非バスク人が半々であった。1622年にバスク人有力者のひとりが殺害されるという事件が起きた。犯行に加わったと目された数人のエストレマドゥーラ人の逮捕拘留が引き金になって、騒動や小競り合いが起きた。バスク人集団に対抗してカステイーリャ人、エストレマドゥーラ人、アンダルシア人らは徒党を組んで戦端を開いた。彼らは「ビクーニャス（vicuñas）」と呼ばれた¹⁴。両者の対決は次第にエスカレートしていき、戦いは1625年まで続いた¹⁵。バスク人側は人口の面でビクーニャスに著しく劣っていたけれども、団結力の点ではバスク人側が優勢であった。3年におよぶこの戦いのポトシ市における犠牲者(死者)数は、白人(スペイン人とクリオーリョ)が3332人、メスティソ・原住民・黒人系が2435人、そしてポトシ郊外での死者数が685人、負傷者数は合計で3728人とこの報告がある¹⁶。ビクーニャスが、バスク人に好意的だったコレヒドール、フェリペ・マンリケ〔Felipe Manrique.在位1623～?・非バスク人(アンダルシア人)。親バスク派〕を襲撃した(このとき、コレヒドールの家事使用人が殺害され、コレヒドール自身も負傷した)頃を境に、ビクーニャスの敗色が濃くなっていき、ビクーニャスは最終的に敗北する。バスク人は権力を取り戻し、戦いに勝利したのだ¹⁷。

研究史について述べておく。1950年代半ば、セビーリャのインディアス古文書館におかれていた史料のなかに、この戦いに関する記録が見つかり、それはルイス・ハンケ(Lewis

¹² *Ibid.*, p.44.

¹³ 17世紀ポトシ市に関連して使用される、“veinticuatro”（「24」の意味）なる用語は、ポトシ・カビルドのメンバー（市参事会員）が「24名」いたことに起因する。その構成人数「24名」をもっぱら指すが、カビルド（市参事会）自体を指す場合もある。Peter Bakewell, *Miners of the Red Mountain: Indian Labor in Potosí, 1545-1650* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1984), p.195.

¹⁴ 彼らが南米ラクダ科動物ビクーニャの毛でできた帽子を被っていたことから「ビクーニャス」とよばれたとする説が有力である。ほかに、戦いのさい彼らが携えていた剣の柄が長く、それがまるでビクーニャの首のようであったからだとする説もある。

¹⁵ 当時のペルー副王は、エスキラチェ公の後任のグアダールカサル侯（Diego Fernández de Córdoba, marqués de Guadalcazar, XIII Virrey. 在位 1622-1629）であった。スペイン国王フェリペ4世（Felipe IV. 在位 1621-1665）統治下。

¹⁶ Bartolomé Arzáns de Orsúa y Vela, *Historia de la Villa Imperial de Potosí* (Edición de Gunnar Mendoza y Lewis Hanke, vol.1) (Providence: Brown University Press, 1965), p.399.

¹⁷ Jurgi Kintana Goiriena, “La “nación vascongada” y sus luchas en el Potosí del siglo XVII. Fuentes de estudio y estado de la cuestión.” *Anuario de Estudios Americanos*, Tomo LIX, No 1, 2002, pp.287-289. Paulina Numhauser, “Un asunto banal: las luchas de vicuñas y vascongados en Potosí del siglo XVII.” *Revista Illes Imperis*, 14, 2012, pp.115-116.

Hanke)やグンナール・メンドーサ(Gunnar Mendoza)らによって公表されることとなった。メンドーサはまた、自らがチーフを務めるボリビア国立古文書館(Archivo Nacional de Bolivia)において関連史料を収集した¹⁸。歴史家のアルベルト・クレスポ(Alberto Crespo R.)は1956年に最初の研究成果を発表した。その後、1969年、1975年、1997年に改訂版を刊行していく。1997年の最新改訂版は、手元の情報を、バルトロメ・アルサンス・デ・オルスーア・イ・ベラ(Bartolomé Arzans de Orsúa y Vela)の『帝国都市ポトシの歴史(Historia de la Villa Imperial de Potosí)』とすり合わせたものである¹⁹。1960年にはフランスの研究者マリ・エルメル(Marie Helmer)の研究論文が刊行された²⁰。近年では、スペインやメキシコの研究者による論考が発表されている²¹。

わが国においてこのテーマは、ポトシ銀山史研究の中でエピソード的に触れられる程度であり、研究成果は皆無の状況である。

そこで本稿では、この戦い発生までの経緯を明らかにし、この事件の社会経済的背景を考察する。そのさい、当時のポトシ銀山運営の実情を、第5代ペルー副王トレドの「改革」以降に出現したスペイン王権の「国庫拡張主義」を基軸として分析する。

本稿の構成は以下のとおりである。第I章では、「ポトシの社会と銀鉱業運営の実態」について考察する。第II章「ポトシとバスク人」では、バスク人の実態や対立の構図について検討する。そして最終章で結論を述べる。

I ポトシの社会と銀鉱業運営の実態

本章では、ポトシ銀鉱業社会を、ポトシ銀山発見から1570年代前半までの時代状況と、1570年代後半以降の時代状況とに分けて、その相違点を念頭においてみていく。そして、王権と私企業による官民混合事業が出現する1570年代後半以降の王権の事業にそって、「負債」供与の実態をその特色や問題点とともに検討する。

1. 帝国都市ポトシの登場

1545年以降ポトシのセロ・リコ(Cerro Rico.富の山)では銀の鉱脈が次々と発見され

¹⁸ Gunnar Mendoza L., *Guerra civil entre vascongados y otras naciones de Potosí. Documento del Archivo Nacional de Bolivia (1622-1641)* (Potosí, 1953).

¹⁹ Crespo, *op.cit.*, pp.9-10. Arzans de Orsúa y Vela, *Historia*……の該当箇所は、Libro VII de la Primera Parte (第I部7巻) (pp.321-407.)である。

²⁰ Marie Helmer, “Luchas entre vascongados y ‘vicuñas’ en Potosí.”, *Revista de Indias*, XX, núm.81-82, Madrid, 1960, pp.185-195.

²¹ Numhauser, *op.cit.*, pp.113-138. Kintana Goiriena, *op.cit.*, pp.287-310. Bernd Hausberger, “Paisanos. La etnicidad de los vascos en Potosí, c. 1600-1625.” *Caravelle* (Universidad de Toulouse), no.101, 2013, pp.173-192.

ていった。最初に発見された鉱脈(veta)は「ディエゴ・センチノ (la Veta de Diego Centeno)」と名付けられた。チュキサカ [Chuquisaca.ラプラタ (La Plata)とも呼ばれた。現スクレ市] の軍人にして司直、エンコメンデーロのディエゴ・センチノ (el capitán Diego Centeno, general y justicia mayor) に敬意をはらったのである。セロを横切る鉱脈は「リカ (Veta Rica)」と命名された。また別の鉱脈は、「フラメンコス (Veta de los Flamencos)」、「メンディエタ (Veta de Mendieta)」、「エスターニョ (Veta del Estaño)」と名付けられていく²²。ポトシ銀鉱業が最盛期に入った1584年ごろでは、ポトシ銀山の鉱脈は合計「92(このうち3か所は“vetilla”と表示)」存在したことが報告されている²³。(話をポトシ銀山発見当時に戻すと)ゴンサーロ・ピサロ (Gonzalo Pizarro) の反乱 (1544-46年) によって当時のペルー社会はごった返していた。銀鉱脈発見のニュースは即刻伝わり、多くの人々、とくに冒険家が一攫千金の富にありつこうとポトシに押し寄せた²⁴。

一つの町がポトシの山(セロ)の麓に形成された。銀山開発に参加しようと望む人々によってそれは雑然と形成された。当初、この富の永続に希望がもてるのか否か、定かではなかった²⁵。そのために、都市建設に向けて正式な手続きは行われなかった。最初の住民は都市建設に無関心であり、住民と国家が結ぶ都市建設契約 (Asiento) にも関心がもたれなかった²⁶。しかしやがて、ポトシ銀山の銀生産の潜在的能力がきわめて大きいことが判明する。ポトシは全面的にチャルカスのアウディエンシア (Audiencia de Charcas.1559年に発足) の管轄下におかれることになる。1561年11月に第4代ペルー副王ニエバ伯 (Diego López de Zúñiga y Velasco, Conde de Nieva, IV Virrey.在位1561-64) はポトシの管轄をめ

²² ポトシの山は「スマフ・オルコ (Sumaj Orko)」と呼ばれた。ケチュア語で「美しい山」の意味である。ポトシの山は荒涼たる土地にあったけれども、近くには原住民牧民が暮らすカントゥマルカ (Cantumarca) 村があった。またポトシから7レグア (leguas.1レグアは5572m) 離れた南西部近郊にはボルコ銀山があって、1543年にはスペイン人が既に住み着いていた。Crespo, *op.cit.*, pp.15-17.

²³ 第6代ペルー副王マルティン・エンリケス (Martín Enriquez de Almansa, Marqués de Alcañices, VI Virrey.在位1581-1583) の命を受けて、リマのアウディエンシアのアルカルデ、ディエゴ・ロペス・デ・スニガ (alcalde de corte de la Real Audiencia de Los Reyes, Diego López de Zúñiga) が行った巡察記録「この山にある鉱脈について」にもとづく。Luis Capoche, *Relación general de la Villa Imperial de Potosí*. en Biblioteca de Autores Españoles, vol.122, Edited by Lewis Hanke (Madrid: Ediciones Atlas, 1959), pp.79-102. なお、ルイス・カポーチェ (ポトシ鉱山業者) の報告書は、1585年に第7代ペルー副王フェルナンド・トーレス・イ・ポルトゥガル (Fernando de Torres y Portugal, Conde de Villar, VII Virrey.在位1585-1590) に宛てて、ポトシ銀山の現状を報告した記録である。

²⁴ Crespo, *op.cit.*, p.29.

²⁵ Pedro Vicente Cañete y Domínguez, *Guía histórica, geográfica, física, civil y legal del Gobierno e Intendencia de la Provincia de Potosí*. (Potosí: Editorial Potosí), por todas partes.

²⁶ Crespo, *op.cit.*, p.21. ポトシ銀山が発見された1545年当時から、1550年代10か年間の前半にかけての時代、ペルーは内乱状態にあり、社会は混乱のさなかにあったことを想起したい。ペルーにおいてスペイン植民地時代が事実上始まったのは、内乱 (スペイン人征服者間の争い、スペイン人征服者とそれを鎮圧しようとするスペイン王権との間の争いに限定した場合の内乱という意味で) 終結後に就任した第3代ペルー副王カニエテ侯の統治期 (Andrés Hurtado de Mendoza, Marqués de Cañete, III Virrey.在位1556-1560) からである。ポトシ銀山の銀「5分の1税」の徴収記録が残されているのも1556年からである。しかし、もう一つの内乱である原住民の抵抗運動—ビルカバンバの新インカ国家による国土回復戦争—は1572年9月まで続いた。拙稿「16世紀ペルーにおけるタキ・オンコイの政治・社会的背景をめぐる試論」『ラテンアメリカ・カリブ研究』、第22号、2015年、42頁、45-46頁、53頁。

ぐって、チャルカスのアウディエンシア関係者と審議会を開いた。その結果、ポトシが「帝国都市ポトシ (la Villa Imperial de Potosí)」と称されるべきこと、カビルド(市参事会)が設置され、それは2人のアルカルデ(市長)と、当面は6人のレヒドール(市参事会員)から構成されるべきこと、このことは1562年からスタートすること、などが決議された。同日、副王ニエバ伯は2人の市長にホアネス・デ・アギーレ(Joanes de Aguirre)とエルナンド・マテオ(Hernando Mateo)を指名した。レヒドールにはフランシスコ・パチエコ(Francisco Pacheco)、フランシスコ・ゴンサレス(Francisco González)、フアン・オルティス・ピコン(Juan Ortiz Picón)、フアン・トラビエソ(Juan Travieso)、フアン・デ・ゴイコリア(Juan de Goycorría)、ロドリゴ・デ・ソリア(Rodrigo de Soria)を選出した²⁷。これらの人々の多くは鉱山業者であり²⁸、以後も鉱山業者がポトシ市のアルカルデやレヒドールに就任することになった。カビルドはポトシ市の行政や経済活動全般に関与し、銀鉱業の運営・管理にかかわるようになった²⁹。

ポトシに到着した人々は生活面で大変な困難に遭遇した。ポトシ市の標高は4000^{ポトシ}を超えており、寒冷で不毛の地ゆえに食料をはじめとする生活必需品は皆無だった。食品をはじめとする生活必需物資をポトシに提供することで一儲けしようと目論んだのが、ポトシ周辺部にあったエンコミエンダである。まずはチャルカス一帯のエンコミエンダがこれに応じ、やがて広範囲のエンコミエンダもこれに同調するようになった。ポトシにおける需要はたちまち商品価格の高騰を引き起こした(ポトシに物資を提供することでエンコミエンダはたいへん潤った)³⁰。しかしポトシには銀があり、高額な商品の入手といえども不可能ではなかった。世界の遠方から運ばれてくる布地や衣装を取りそろえることもできた。その結果、1580年ごろ以降、4000^{ポトシ}を超えるアンデス高地に国際商業都市ポトシが誕生する。ポトシの中央広場〔la plaza principal.別名はレゴシホ広場(Plaza Mayor o del Regocijo.第1図参照)では舶来品がもっぱら取引された〕は鉱山業者や商人達による商取引の場所であった。鉱山業者は精錬工場のための道具類を求めていた。精錬工場は毎年8000キンタルの鉄や鋼鉄を消費した。珍しい商品、高価な商品といえども見つけられないものは無かったほどである。富者の気まぐれを満足させた。またカーボン広場(la Plaza de Carbón)では、ポトシ周辺部地域から提供された食品をはじめとする生活必需品が販売されていた³¹。舶来品ならびに生活必需品の詳細については別稿において既に考察した。

²⁷ カビルドの構成員数は各都市の規模毎に異なった。「首都」、「司教区の中心都市」、「一般の都市」という3つのランク付けが一般的であった。Moore, *op.cit.*, p.61. Crespo, *op.cit.*, p.22. 一般に、カビルドのレヒドールの官職販売は第3代ペルー副王カニエーテ侯の時代からすでに行われていた。

²⁸ *Ibid.*, p.17, p.19, p.84, p.92, p.102.

²⁹ Helmer, *op.cit.*, p.188.

³⁰ Crespo, *op.cit.*, p.18.

³¹ ポトシ市におけるこうした広場の詳細は、拙稿(2012年)、2-4頁参照。

商品売買のさいにはアルカバラ (alcabala.販売税) が課せられ、年間4万ペソの販売税が国庫 (Real Hacienda) に納められたとの報告がある³²。

俗権のみならず教権〔セクラール (secular.修道会に所属しない在俗聖職者)、レグラール (regular.修道会に所属する聖職者) を問わず〕もまたポトシ市場経済に深く関係した。最盛期のポトシには各派修道会が5会派 (メルセス会、聖アウグスティヌス会、フランシスコ会、ドミニコ会、イエズス会) 進出しており、40以上の教会が存在した。教会に所属する1つの施療院 (hospital.一時に100人以上に介護サービスを提供) と6つの学校が機能していた³³。

ポトシは銀山開発の最初の11年間に2500万ペソの価値の銀を産出したといわれている。そのような額は新大陸ではそれまで未知の桁であった。スペイン国王であり神聖ローマ皇帝でもあったカルロス1世 (=カール5世、el Rey Carlos I. 国王在位1516-56) とこれに続くフェリペ2世 (el rey Felipe II. 在位1556-98) はポトシに盾形紋章 (el escudo) を付与し、ポトシの銀に期待を込めた³⁴。また年代記作者カニェテ・イ・ドミンゲス (Cañete y Domínguez) は、国王フェリペ2世の戴冠を祝うためにポトシの人々が800万ペソを消費したと述べている。最盛期のポトシには舞踊学校、遊技場、闘牛場がたくさんあり、800人の賭博師、120人の売春婦が前代未聞の勢いで跋扈していたという。際だつ美人女性ドーニャ・クララ (Doña Clara) はアジア産の豪華な装飾品に囲まれて暮らしていた。バスク人フアン・オルティス・デ・サラテ (Juan Ortiz de Zárate. 1521-1576年。バスクの貴族家系の出身) の晩年の生活スタイルに示されるように、鉱山業者は市の中心部に豪華な邸宅を構えていて、チュキサカの統治者に指名されるくらいの富を蓄えていた³⁵。鉱山業者の富は32の人工湖を作るのにも投入され、その水は120の精錬所を稼働させた³⁶。

副王トレドの時代、銀の精錬に関して、(風炉を使用する) 原住民の熟練した精錬方法であるワイラス法 (las Huayras: la tradición andina o la herencia prehispánica) に代わって、(ヨーロッパ伝統の) 水銀を使用する水銀アマルガム法 (la metalurgia por amalgamación: la tradición castellana o europea)³⁷ を採用したことが、ポトシの銀生産量の革命的増加をもたらす。すなわち1560年代後半になるとポトシ銀山では表面のきわめて豊かな銀の堆

³² Crespo, *op.cit.*, pp.18-19. 拙稿、「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究—ポトシ市場経済圏の形成—(前編)」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、No.11、京都外国語大学、2011年、63-77頁参照。

³³ Crespo, *op.cit.*, p.19, p.21. ビクーニャスとバスコンガドスの戦いと聖職者との関係についてはよくわかっておらず、検討の余地があると研究者は指摘している。

³⁴ *Ibid.*, pp.20-21.

³⁵ オルティス・デ・サラテに関しては、拙稿 (2012年)、16-17頁参照。

³⁶ Crespo, *op.cit.*, p.21.

³⁷ この精錬法はヌエバ・エスパーニャ (メキシコ) のパチューカ鉱山ではバルトロメ・メディナ (Bartolomé Medina) によって1554年から採用されていた。Juan Carlos Garavaglia, "Plata para el Rey. Tecnología y producción en el Potosí colonial." en *Potosí plata para Europa* por compilación de Juan Marchena Fernández (Sevilla: Universidad de Sevilla/Fundación EL MONTE, 2000), p.129.

積層の大部分が掘り尽くされて高品位の鉱石が枯渇し、低品位鉱石からの銀鑄造に歯止めがかかっていた。しかしワンカベリカ水銀鉱山の発見（1564年ごろ）とその後（1570年代後半以降）の国家による水銀の独占と販売、チンチャ港、アリカ港経由によるポトシへの水銀輸送体制の確立〔ポトシに到着した水銀は王の倉庫 (los almacenes reales) に保管され、ポトシ財務府役人 (los oficiales de la Real Caja de Potosí) が精錬業者に水銀を販売した〕、そして水銀による精錬法（水銀アマルガム法）の確立（その導入の決定は1572年。ポトシへの実際の導入開始は1574年のこと）によって、ポトシの銀生産高は未曾有の上昇を遂げた³⁸。このことは裏返していうと、水銀の供給がポトシ銀鉱業の生命線になったことにほかならない。副王トレドによるミタ再編政策（1575、6年ごろポトシ銀山のミタを王権が掌握。ミタヨの提供を王権が独占）ならびに精錬法の変更に伴う新技術の導入（複合施設の建設）、すなわちポトシ市近郊における人工湖（ダム）の建設とそこから精錬所への水の供給体制の確立（人工湖から送られてくる大量の水は、水力式精錬工場の運営にとって不可欠であった）³⁹とも相まっての結果である。ミタ再編政策は鉱山業者（精錬業者）に安価で豊富な原住民労働力を提供した⁴⁰。1575年以降、「5分の1税」の徴収額は一挙に回復し上昇を遂げた⁴¹。

2. 「負債」制の出現とその展開

ポトシにおいて水銀の販売は王権（ポトシ財務府）役人の担うところとなった。スペイン王権が水銀の唯一の所有者として水銀販売を独占し、「信用貸し（掛け売り）」で水銀を精錬業者に提供した。「負債」制の出現である⁴²。言い換えると、精錬業者はこの制度のもとで水銀を手に入れ、負債者となった。王権にとって水銀販売の独占はポトシにおける銀生産量の予測を可能にした。「5分の1税」の未払いを防ぐという意味でこれは一石二鳥の策となった。1608年の場合、王権（ポトシ財務府）は水銀の掛け売り額として150万ドゥカード⁴³の「負債」を鉱山業者に供与していた。次に、「負債」額を王権が回収する方法についてみてみよう。精錬業者に販売された水銀の代金は、精錬業者（鉱山業者）が生産した銀

³⁸ Crespo, *op.cit.*, p.20.1572年にペドロ・エルナンデス・デ・ベラスコ（Pedro Hernández de Velasco）らは水銀アマルガム法によるポトシ銀鉱石からの銀の精錬に成功した。Kendall W. Brown, *A history of Mining in Latin America from the Colonial Era to the Present* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 2012), pp.19-20.

³⁹ 水銀アマルガム法による銀の精錬は、粉碎した銀鉱石と水銀の融合物を水に沈め、銀を分離して取り出す方式であったから、大量の水を必要とした。

⁴⁰ これは原住民労働者の賃金に関係する。自発的労働者つまりミンガ（minga）の1週当りの賃金が7ペソであったのに対し、強制された労働者であるミタヨ（mitayo）の場合は2.5ペソであったといわれている。Crespo, *op.cit.*, p.20, p.26. Brown, *op.cit.*, p.21.

⁴¹ Crespo, *op.cit.*, p.41. Helmer, *op.cit.*, p.188. Brown, *op.cit.*, p.20.

⁴² Crespo, *op.cit.*, p.42.

⁴³ ドゥカード（ducado）とは金額の単位で、375 マラベディス（maravedi/maravedises. スペインの昔の貨幣）の価値を有す。Ibid., p.29.

によって支払われるはずであった⁴⁴。しかしながら、現実には王権の見込み通りにはいかなかった。というのも、精錬業者（鉱山業者）は長期にわたって「負債」を貯め込み、支払いをできるだけ引き延ばしたからである。「負債」額は雪だるま式に膨らみ、たえず「返済不可能」を彼らは表明していた⁴⁵。

事実、1608年にポトシ財務府を視察したチャルカスのアウディエンシア議長マルドナド・デ・トーレス (Maldonado de Torres) は「負債」の未回収部分が莫大な額に達していることを知らされた。こうした事態が発生した背景には、ポトシ銀鉱業の進展を急ぐあまり、「負債」の徴収が厳格に行われてこなかったという事情があったものと判断される⁴⁶。さらにもうひとつの背景として、財務府役人の「意図的な怠慢や不正による徴収の引き延ばし」が考えられる。その証拠に、財務府では「負債」帳簿の紛失事故が頻発していた⁴⁷。膨らんでいた「負債」総額は1619年3月における、先述の会計検査官パストラナ⁴⁸の調査報告によると246万5876ペソであった。その詳細は第1表のとおりである。これをみると、水銀の販売料は86万318ペソであり、それは全体の34.9%を占めていた。さらに、「負債」制度は「水銀販売」に止まることなく、他のことからも及んでいた。つまり「ミタ原住民の割り当て」や「売却された公職の額」、「アルカバラ（商品の販売税）」、「鉱山の賃貸し料」などにも適用されていたことがわかる⁴⁹。

「負債」のうち徴収額が第1位を占める「ミタ原住民の割り当て」の実態についてみておこう。ポトシでは「鉱山の大家長(alcalde mayor de minas)⁵⁰」が各鉱山業者からミタ労働者の受給申請を行わせ、人員配分を調整した。一方、ミタの原住民を送り出す側であるアルティプラノの各原住民村では、「ミタ選出長(capitán general de la mita. 一般には各原住民共同体の首長がこの役職に就いた)」がミタ対象者(18歳から50歳までの共同体員の成年男子)を選出しポトシに派遣した⁵¹。ポトシにおいてミタ労働者を受給した鉱山業者は、

⁴⁴ *Ibid.*, p.41, p.44. 「負債」額の記載が帳簿から漏れていたといった理由もあった。

⁴⁵ Numhauser, *op.cit.*, p.119. ナムハウザーは次のごとく指摘している。"el rey Felipe II, al expropiar las minas de Huancavelica, se ocupó de monopolizar el azogue que vendía fiado a los señores de los ingenios, quienes de esta manera adquirirían enorme deudas imposibles de saldar."

⁴⁶ 元とはいえば、副王トレドがポトシへの水銀精錬法の導入ならびにミタ制の導入を軌道に乗せるため、「負債」特権を鉱山業者に認める勅令(Ordenanza)を出したことにあった。トレド以降も、第6代ペルー副王マルティン・エンリケス(在位1581-83)をはじめ歴代の副王がトレドの方針を改めなかった。1602年になってチャルカスのアウディエンシアがこの事態に異議を唱えるが、鉱山業者への対策は見送られた。対応はリマの当局に戻された。国王は1609年3月15日付の勅令によって、リマ会計審査会(el Tribunal de Cuentas de Lima)の最古参の会計検査官に調査を命じた。Crespo, *op.cit.*, pp.43-44. 参照。

⁴⁷ *Ibid.*, pp.42-43.

⁴⁸ 副王エスキラチェ公(在位1615-1621)によって選出されたパストラナは、最初にラパス財務府(las Cajas de La Paz)を点検した後、1618年8月、ポトシに到着し任務に就いた。*Ibid.*, p.44.

⁴⁹ Helmer, *op.cit.*, p.188. エルメルは、この「負債」総額が銀「5分の1税」の3倍の額であり、またこの「負債者」は「バスク人の鉱山主・精錬所所有主」であったと述べている。

⁵⁰ この役職は、「アルカルデ(alcaldes ordinarios)」とは別に存在した。

⁵¹ 拙稿(2012年)、10頁、21頁。「ミタ選出長」に選ばれたカシケは、徴集予定の原住民のうちの何割かが不在者であるという現実に遭遇させられた。その苦勞や対応など詳細については、Roberto Choque Canqui, *Sociedad y economía colonial en el sur andino* (La Paz: HISBOL, 1993), pp.43-46. 参照。

その労働者数に応じて(王権に)代金を支払った。

ポトシ・カビルドのレヒドールの「負債」額は、1621年の場合、年間18万5058ペソであった⁵²。トーレスは「負債」の全面回収に向けて2人の特別職員(dos funcionarios especiales)を指名し任務に就かせ、問題を解決しようとした。しかし、リマの会計本部(la Contaduría Mayor)は、やがてその仕事の中止を命じている。水銀供給を急ぐ必要上、「負債」の即刻回収は無理と判断したからではなかろうか⁵³。

第1表 ポトシにおける「負債(deudas)」の構成(1619年3月)

「負債」の対象項目	蓄積された「負債」額 〔単位：ペソ(pesos ensayados)〕	全体に占める割合 (単位：%)
水銀販売料	86万318	34.9
鉱山の賃貸し料	3万9979	1.6
ミタ原住民の割り当て料	91万2318	37.0
公職販売額	26万9330	10.9
ポトシとラプラタのアルカバラ(販売税)	12万3673	5.0
その他	26万258	10.6
	総額 246万5876*	100.0

* クレスポの記述には、「246万5886ペソ」とあるが、総額を計算したところ、「246万5876ペソ」となるので、訂正を加えた。

出所：Alberto Crespo R., *La guerra entre vicuñas y vascongados, Potosí 1622-1625* (Sucre: Universidad Andina Simón Bolívar, 1997), p.47.

II ポトシとバスク人

ポトシにおけるスペイン人同士の抗争は銀山の発見と同時に始まったと述べている⁵⁴。年代記作者アルサンス・デ・オルスーア・イ・ベラは、1564年にカスティーリア人とアンダルシア人のあいだに多くの利益集団が存在したこと、またポルトガル人、エストレマドゥーラ人の間にも諸党派があつて、党派間に武力抗争が生じ、死者や負傷者が続出したと述べている⁵⁴。また1579年にはエストレマドゥーラ人とバスク人との間で武力衝突が起き、以後、スペイン人の間でバスク人が共通の敵になりはじめたと年代記作者は指摘する⁵⁵。スペイン人の行動様式や気質に注目すると、アンダルシア人・カスティーリャ人・エストレマドゥーラ人は征服以降も、とくにペルーの内乱(1537年から1548年にかけての征服者間の内紛、征服者とスペイン王権間の争い)のさいには兵士として身を処すなど、軍事行動に長けていた。定住を嫌い怠惰で放浪好きであり、軍人志向の傾向にあった。それに比

⁵² Crespo, *op. cit.*, p.49.

⁵³ *Ibid.*, p.42.

⁵⁴ Arzáns de Orsúa y Vela, *op. cit.*, p.177.

⁵⁵ Crespo, *op. cit.*, p.33. Numhauser, *op. cit.*, p.116.

べて、バスク人は元から功利主義者であった。ポトシ銀山発見以降、いちはやく銀鉱業に関与するようになり、銀山開発に情熱を傾けるのだった⁵⁶。またポトシ市場が膨らんでくると、バスク人はそのネットワークを利用して商業や輸送業、農牧畜業など経済活動に従事するようになった。

本章では、まず、ポトシにおけるバスク人の実態を考察する。次に、バスク人がなぜほかのスペイン人たちから疎まれ、攻撃の対象とされるに至ったのか、その状況を探る。

1. バスク人の実態

バスク人の一般的な特徴として、進取の気性に富み、企業家精神を有していたことが指摘されている⁵⁷。彼らはポトシにおいて銀鉱脈を採掘し精錬所を運営した。と同時に、カビルドのレヒドールをはじめ多くの役職を占有した。カビルドを支配することはポトシ市政を牛耳ることであり、そのことは銀鉱業に重大な影響を与えた。

新大陸においてバスク人は互いに団結し連帯関係を築いた。チャルカスのアウディエンシアの役人はバスク人について次のように語っている。「……ビスカヤの人々は少数だが、団結した人々である……彼らはお互いに助け合う」と。ポトシのバスク人は、イベリア半島出身の他のスペイン人に比べると、人口面ではたいへん少数であったけれども、団結力という点においては他のスペイン人にひけをとらなかった⁵⁸。ポトシのバスク人にとって同郷(同国)人としての連帯形成の一翼は、1601年にポトシで組織されたバスク人信徒会 (la cofradía vasca : las hermandades vascas) にあったとハウスバーガーは考察している。彼によれば、その創設署名者合計82人に占める出身地別内訳は、ギプスコア出身者32人(39.0%)、ビスカヤ出身者22人(26.8%)、アラバ出身者10人(12.2%)、表示無し16人(19.5%)であった〔()内の%は全体に占める割合〕。前三者が占める割合は全体の78%である。署名者としては「ベラサテギ (Verasátegui)」、「マダリアガ (Madariaga)」、「オヤヌメ (Oyanume)」、「オケンド (Oquendo)」(これらは全員がポトシ鉱山業者—後述)の名前が目立つと指摘する⁵⁹。

17世紀に入ると、かつてポトシに押し寄せたスペイン人も世代交代しつつあった。イベリア半島生まれのスペイン人はしだいに減少し、新大陸生まれのクリオーリョが増えつつあった。クリオーリョ世代になると、その結束力や団結力は一般的に薄らぐ傾向にあった。しかしバスク人同士の結束力や団結力は依然として強固であった。

バスク人の結束力を示す逸話がある。簡単に見てみよう。カステイーリャ人を殺害した

⁵⁶ Crespo, *op.cit.*, pp.32-34.

⁵⁷ *Ibid.*, p.31.

⁵⁸ Crespo, *op.cit.*, pp.32-33.

⁵⁹ Hausberger, *op.cit.*, p.4.

とする罪によって、2人のバスク人が絞首刑にされる寸前のこと、ドミンゴ・デ・ベラサテギ(バスク人グループの有力者)が死刑執行を中止するよう、コレヒドールのラファエル・オルティス・デ・ソトマヨール〔Rafael Ortiz de Sotomayor.在位1608-1617.非バスク人(カスティーリャ人)ながら親バスク派の立場にいた。元軍人〕と交渉した。その結果、2000ペソを支払うことでこの2人は死刑を免れた。また同時期に、広場で騒ぎを起こしたとして捕えられた1人のバスク人が、このベラサテギによって直ちに解放されている。バスク人による違法行為はそれ以後も起きたけれども、たえず同邦有力者の介入によって、罪を免れていた⁶⁰。

「レヒドール」の役職取得価格についてみると、他の都市、例えばラパス市などのケースに比べて、ポトシ市のそれはいちじるしく高額であった。ラパスではその単価は1000ペソ程度であったが、ポトシでは1万7000ペソほどの値がついたといわれている。新大陸植民地の他のいかなる都市における当該役職よりも、ポトシのそれは高額であったと判断される。1608年に、バスク人エルナンド・オルティス・デ・バルガス(Hernando Ortiz de Vargas)はポトシの「執行官(alguacil mayor)」のポストを得るのに11万ペソという法外な金額を支払っている⁶¹。バスク人は富裕であったから、高額な金額を役職入手に費やすことができたのである。

コンスエロ・バレラの研究によると、17世紀初め、ポトシではバスク人が権力を握っており、1602年にポトシにいたバスク人について、およそ200名が精錬業者(鉱山業者)、160名が商人であったこと、さらに、カサ・デ・ラ・モネダの役人38名中22名がバスク人であり、財務府役人10名のうち6名がバスク人であったと指摘している⁶²。当時ポトシにおいて公職に就いていたバスク人の名前とその役職名を、少しあげてみよう。ディエゴ・デ・アルビス・ベラスケス(Diego de Alviz Velásquez)は王党軍少尉(alférez real)であり、アルフォンソ・レルス(Alfonso Reluz)はカサ・デ・モネダの財務官(tesorero)であった。そのほか、ドミンゴ・デ・ベラサテギ(Domingo de Verasátegui.1617年にアルカルデを歴任。1622年に死去。妻はクララ・ブラボ・デ・カルタヘナ)、バルトロメ・マルティネス(Bartolomé Martínez)、フアン・グティエレス・デ・パレデス(Juan Gutiérrez de Paredes)、クリストバル・デ・パレデス(Cristóbal de Paredes)、マヌエル・デ・スムディオ(Manuel de Zumudio)、アントニオ・デ・ルエダ(Antonio de Rueda)がレヒドールの地位を占めていた⁶³。

⁶⁰ Crespo, *op.cit.*, pp.35-36.

⁶¹ *Ibid.*, P.34.

⁶² Consuelo Varela, “El magnetismo de Potosí. La Babilonia americana.” en *Potosí plata para Europa* por compilación de Juan Marchena Fernández (Sevilla: Universidad de Sevilla/Fundación EL MONTE, 2000), p.181.

⁶³ Crespo, *op.cit.*, p.34, pp.44-45.

次に、バスク人レヒドールの「負債」についてみると、彼らは水銀購入のほか公職の購入費などをも含めて、並はずれた額の「負債」を負っていた。バスク人グループの指導者の一人であったドミンゴ・デ・ベラサテギは少尉のポストを手に入れるのに3779ペソの「負債」を、鉱山の賃借り料として1661ペソの「負債」を有していた。彼の兄弟のペドロは、合計1万6316ペソを、またペドロ・デ・バジェステロス (Pedro de Ballesteros) は合計1万87ペソの「負債」を抱えていた⁶⁴。

1618年8月、ポトシに到着した会計検査官パストラナは、支払いが滞っていた「負債」を回収するために、思い切った対策を講じることにした。それは、「負債者(債務者)」が公職に就いている場合、「負債」の完済が履行されない限り、その公務を停止するというものであった。ペルー副王(エスキラチェ公)の方針としてこれを「公示 (pregón)」した。このことが大きな波紋を広げた。カビルドでは市長選挙が間近に迫っており、1619年1月1日がその投票日であり、レヒドールにその投票権があったからだ。すなわち24名のレヒドールが2名のアルカルデを選ぶ選挙である⁶⁵。アルカルデの任期は1年であり、毎年1月1日にその選出が行われていた。「負債」を完済できないバスク人は公務を停止させられ投票権を失う見通しとなった⁶⁶。この難局に、関係者はどう対応したのだろうか？結論を先に述べると、レヒドールたちは「公示」を無視して市長選挙を敢行したのである。結果的にアルカルデは、バスク人側から1名、非バスク人側から1名選ばれた。財務府検察官バルトロメ・アステテ・デ・ウリョア (Bartolomé Astete de Ulloa.在任期間1614.8.14.～?非バスク人—第3表参照) は後に、この選挙が正当な選挙ではなかったとしてアウディエンシアに告発している。(バスク人側に与していた)コレヒドール、フランシスコ・サルミエント・デ・ソトマヨール [Francisco Sarmiento de Sotomayor.在位1618—非バスク人(ガリシア人)。親バスク派] による不正工作の疑いがあるとして⁶⁷。他方、バスク人であるベラサテギ兄弟やバジェステロス兄弟をカビルドから追放しようとしたパストラナは、バスク人にとって憎悪的となった⁶⁸。

1614年から1622年までの9か年間におけるポトシのアルカルデ選出選挙の結果をみてみると、選出された合計18名(2名×9年=18名)のアルカルデのうち9名、つまり50%がバスク人であった(第2表)⁶⁹。また1612年から1626年にかけてのポトシ財務府三役の構成は

⁶⁴ *Ibid.*, p.9.

⁶⁵ しかしときたま、別の選出方法が採用される場合があった。1603年のこと、ペルー副王ルイス・デ・ベラスコ (Luis de Velasco, Marqués de Salinas. 在位 1596-1604) は、ポトシ市においてアルカルデ選出に付随する騒動の発生が懸念されたため、レヒドールに代わって執政官に選出を命じている。派閥間の争いによる混乱を避けるためであった。Moore, *op.cit.*, P.81.

⁶⁶ Crespo, *op.cit.*, p.44.

⁶⁷ *Ibid.*, pp.45-46.

⁶⁸ *Ibid.*, p.45, p.60.

⁶⁹ その他、Helmer, *op.cit.*, pp.189-190. 参照。

第3表の如くであった。第2表と第3表から、ポトシのアルカルデと財務府役人との間では同一人物が横断的に役職に就いていたことがわかる。「ルイス・ウルタド・デ・メンドーサ(非バスク人)」と「フアン・パウティスタ・デ・オルマエギ(バスク人)」のケースである。こうした状況は、先の1章2節で述べた「負債」の未回収をめぐる第二番目の理由である「財務府役人の意図的な怠慢や不正による徴収の引き延ばし」を暗示しているように思われる。

第2表 1614-1622年、ポトシのアルカルデ(2名)

年	ポトシの2人のアルカルデ・オルディナリオ(市長)の名前(ゴチック体がバスク人)
1614	マルティン・デ・オルマチェ/フランシスコ・デ・サス・カラスコ
1615	ドミンゴ・ベルトラン/マルティン・デ・ベルテンドナ
1616	ラサロ・デ・エルナニ/フアン・デ・パレデス・エレラ
1617	サンチョ・デ・マダリアガ/ドミンゴ・デ・ベラサテギ
1618	アントニオ・デ・アルデレテ・マルドナド/ペドロ・アンドラーデ・デ・ソトマヨール
1619	マルティン・デ・ベルテンドナ/ルイス・ウルタド・デ・メンドーサ
1620	フアン・ヌーニェス・デ・アナヤ/フアン・パウティスタ・デ・オルマエギ
1621	サルバドール・デ・カンボス/ラサロ・デ・エルナニ
1622	ディエゴ・デ・ビジェガス/マルティン・デ・サムディオ

出所：Bernd Hausberger, "Paisanos. La etnicidad de los vascos en Potosí, c. 1600-1625." *Caravelle* (Universidad de Toulouse), no.101, 2013, pp.9-10.

第3表 1612-1626年、ポトシ財務府三役(ゴチック体がバスク人)

会計官(contador)	財務官(tesorero)	検察官(factor)
フアン・マルティネス・デ・メカラエタ(在位1612.3.26～1615.6.20)	エステバン・デ・ラルタウン(在位1612.3.26～1615.6.3)	フアン・デ・サンドバル・グスマン(在位1612.3.26～1614.8.14)
フアン・デ・サンドバル・グスマン(在位1615.6.20～1615.10.21)	フアン・デ・ルノ(在位1615.6.3～1615.9.26)	バルトロメ・アステテ・デ・ウリョア(在位1614.8.14～?)
エルナンド・ロマ・ポルトカレロ(在位1615.10.21～1616.4.11)	ルイス・ウルタド・デ・メンドーサ(在位1615.9.26～1616.4.11)	
フアン・パウティスタ・デ・オルマエギ(在位1616.4.11～1619.3.8)	フアン・デ・ルノ(在位1616.4.11～1618.2.9)	
ホセ・サエス・エロルドウイ(在位1619.3.8～?)	フリオ・フェロフィノ(在位1618.2.9～1618.12.24)	
	トマス・デ・オルナ・アルバラード(在位1618.12.24～1626)	
	フアン・デ・ラミレス・フリアス(在位1626～?)	

出所：Hausberger, *op.cit.*, pp.10-11.

2. 対立の構図

ポトシに存在するスペイン人（あるいはスペイン系）人口⁷⁰に占めるバスク人の人口は、イベリア半島の他の地域出身のスペイン人やスペイン系の人口に比べると、まことに少数であった。ポトシ財務府会計官（contador）ホセ・サエス・デ・エロルドゥイ（José Sáez de Elorduy.1619.3.8～?。バスク人—第3表）は、1622年において有力バスク人がすべて鉱山業者であり、その代表的人物としてベラスATEGUI族（los Verasátegui）〔とくにアントニオ（Antonio）、ドミンゴ（Domingo）、ペドロ（Pedro）が有名〕、フランシスコ・デ・オヤヌメ（Francisco de Oyanume）、サンチョ・デ・マダリアガ（Sancho de Madariaga）、フアン・デ・オケンド（Juan de Oquendo）らをあげている⁷¹。

先述したように、副王トレドの改革によって、ポトシの銀生産額は16世紀の70年代末から17世紀初頭にかけて著しく増加した。しかしこの未曾有の繁栄の3、40年間が過ぎると、ポトシの銀鉱業は凋落に向かう。銀の生産量が著しく下落してゆく。歴史家アベシア・バルディエソは、1617年から1633年にかけて、ポトシの銀生産量が、それに先行する同じ期間（16年間）に比べて約25%下落したと考察している⁷²。このことは、銀鉱業を営む人々にとって深刻な危機となった。この背景のひとつには、銀を精錬するうえでの水銀の使用が大きな人的災害をもたらしたという事情がある。大勢の人々が水銀中毒症に罹り、遅かれ早かれ死に追いやられた。（鉱石採掘現場ならびに）精錬所においては数え切れないほどの死者が出ていた。その悲惨な実態が広く知られるところとなった。その結果、共同体の原住民がミタを回避するために、先祖代々住み続けてきた故郷を捨て去り、フォラステロ（forastero.もっぱらミタを回避するために共同体を離脱し、他の場所に逃亡した住民）となる道を選択する者が急増した⁷³。原住民の逃亡先は、ポトシやラパス、クスコなどの都市、白人の経営する（聖俗の）アシエンダ、異郷の原住民共同体などであった。（スペイン人に）征服されていない土地—その多くがセルバー—to 逃亡する者も出現した。このことがミタの労働力を減少させ、ミタ制の存続を危うくさせたのである。（関連した原住民共

⁷⁰ 拙稿（2011年）、63頁。Paulina Numhouse, *Mujeres indias y señores de la coca, Potosí y Cuzco en el siglo XVI* (Madrid: Cátedra, 2005), p.41, p.43.

⁷¹ Hausberger, *op. cit.*, p.7.

⁷² Valentín Abecia Baldivieso, *Mitayos de Potosí en una economía sumergida* (Barcelona: Tecnicos Editoriales Asociados, 1988), p.103, p.177. アルベルト・クレスポは、1616年から1618年にポトシの5分の1税が著しく減額したと述べている。詳しくは、Crespo, *op. cit.*, p.20. 参照。また1626年3月15日のカリカリダム（サン・イルデフォンソ湖）の崩壊によってリベラ川が破壊されるなどポトシのインフラへの影響が、この銀生産量の下落に拍車をかけた。拙稿（2011年）、62頁、拙稿（2012年）、9頁。Catherine J. Julian, “Las lagunas de Potosí en tiempo de don Pedro de Lodeña: documentos del Archivo de Indias.” *Historia y Cultura*, Vol.24, 1997, p.19, p.22. 1611年のポトシ人口16万人は、17世紀末には7万人に減少していた。Pedro Martínez Cutillas, *Colonial Panama: History and Images* (Barcelona: EMMSA, 2006), p.336.

⁷³ 1619年に、ポトシのミタの年間徴集人数のうち、「4000人（これは年間徴集人数全体の1/3に当たる）」のミタヨが不在（ポトシに来ていなかった）であったと記録されている。ミタの衰退は明白であり、ミタはもとに戻らなかった。Crespo, *op. cit.*, p.20.

同体は崩壊の危機に瀕した。ミタ選出長の中には、苦境に陥った結果、物乞いの生活を強いられたとか、原住民がいなくなり荒れ果て放置されてしまう共同体が現れるなどの事例も報告されている）。ワンカベリカ水銀鉱山でもポトシと状況は同じであった⁷⁴。水銀の産出量が下落し、ポトシへの供給量が制限されるという事態に陥った。ポトシでは水銀の入手がしだいに難しくなってきた⁷⁵。鉱山業者たちは何とかしてこの危機を乗り切ろうと必死になった。鉱山業者間に熾烈な競争を生みだした。まずもって、政治的な縁故、例えば、コレヒドールや財務府役人、アルカルデやレヒドール、鉱山の大判事などとの絆を持っていなかった人々が打撃を受けた。彼らの中には、自分の精錬所を持たない弱小の鉱山業者もいた。破産に追い込まれる者も出た。水銀ならびにミタ労働者が得られなくなったためである。1618年時点で副王エスキラチェ公は精錬部門におけるミタの割り当てを制限していた。そのいっぽうで、王権からの容赦のない諸課税は鉱山業者にとって大きな負担であった。副王トレドの改革以降、徴税方法が整備されていったため、「改革」以前のように税金逃れができにくくなった。鉱山業者はなおいっそう王権に縛られ、自由を奪われていった。こうして鉱山業者をとりまく社会環境は悪化の一途を辿った⁷⁶。

では、スペイン人のうちバスク人にとって水銀の受給率やミタ労働者⁷⁷の受給状況はどうだったのだろうか？水銀の受給率を検討すると、1618年から1623年半ばまでの期間において、ポトシで水銀の配分を受けていた代表者20人のうち、9人までがバスク人であった。すなわち、マルティン・デ・ベルテンドナ (Martín de Bertendona.1615年と1619年の二度にわたってアルカルデを歴任)、フアン・デ・ウガルテ (Juan de Ugarte)、フアン・デ・イバーラ (Juan de Ybarra)、マルティン・デ・ガルニカ (Martín de Gárnica)、グレゴリオ・デ・ラサラガ (Gregorio de Lazárraga)、マルティン・ペレス・デ・ガリヤタ (Martín Pérez de Gallata)、ペドロ・デ・ベラスアテギ (Pedro de Verasátegui)、フランシスコ・デ・オヤヌメ、そしてペドロ・デ・モンドラゴン (Pedro de Mondragón) である。彼らは、合計2740.26キントルの水銀を受け取っていた。全体に割り当てられた水銀の総量は1万3560.19キントルであったとされるから、これは全体の20%にあたる⁷⁸。ポトシの全鉱山業者に占めるバスク人の割合いから判断して、割り当てられた水銀の分量は決して少なくなかったことがわかる。

⁷⁴ Nicholas A. Robins, *Mercury, Mining, and Empire The Human and Ecological Cost of Colonial Silver Mining in the Andes* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2011), pp.179-187.

⁷⁵ Helmer, *op.cit.*, p.194. スペインによる三十年戦争（1618-1648年）への関与もまた間接的ながら、この「危機」に影響を与えたように思われる。Cutillas, *op.cit.*, p.340.

⁷⁶ Hausberger, *op.cit.*, pp.7-8.

⁷⁷ ミタ労働者（ミタヨ）の週給は1人当たり、2.5ペソ。自由労働者の場合は週給9ペソであったから、鉱山業者はミタヨの受給を受けようと躍起になった。私人によるミタヨの販売や又貸しといった現象も生じていた。その対象とされた原住民は「ポケットのインディオ (indios faltriquera)」と呼ばれた。Baldivieso, *op.cit.*, p.91, p.102.

⁷⁸ Hausberger, *op.cit.*, p.9.

次にミタ労働者の受給規模について。まず一般的な傾向についてみると、ミタの原住民労働力徴集数は激減の一途を辿っており、スペイン王権は再びミタの再編をはからねばならなかった。時代は少し後になるが、1633年にペルー副王チンチョン伯はチャルカスのアウディエンシア議長を介して、新しい査定を敢行している。それは1年の3分の1の期間ごとに「4115人(3809人との説もある)」を徴集するという計画であった。ところが、その徴集は予定通りいかなかったようである⁷⁹。では、バスク人鉱山業者にとってこれはどう影響しただろうか？メキシコの研究者ハウスバーガーは、当時バスク人鉱山業者が受け取っていたミタヨの数を次のように算定した。年間にそれぞれ4539人(1610年)、4300人(1618年)、4222人(1624年)、4077人(1633年)であり、1610年から1633年にかけて462人の減少がみられたとした(バスク人鉱山主の数はそれぞれ、137人、117人、106人、96人と推移し、バスク人精錬業者数はそれぞれ80人、89人、83人、62人と推移した)⁸⁰。このデータを見る限り、バスク人鉱山業者は、ポトシのミタヨの年間総徴集規模の少なくとも3分の1以上を受け取っていたことになるから、ミタヨの確保はできていたといわざるをえない。

これとは逆に、非バスク人鉱山業者の場合、ミタヨの受給を満足に受けられなかった。彼らの中には破産し没落していく者が後を絶たなかった。この状況下でバスク人に対する非バスク人の不満が爆発する。1622年1月初め、市長選挙をめぐるカビルド内に敵対関係が再燃した。バスク人が自らの集団から2名の全市長を出そうと企てたことが発端となった。

ビクーニャスの執行部の会合が会計検査官パストラナの邸宅で開かれた。パストラナの家に武器が持ち込まれ、武力による問題解決へと突き進んでいった。4月の抗争では6人が死亡。6月に入るとビクーニャスによるバスク人の頭目サン・フアン・デ・ウルビエタ(San Juan de Urbieta)の殺害計画が浮上する⁸¹。

3人の相次いだポトシのコレヒドール、オルティス・デ・ソトマヨール(カスティーリャ人)、サルミエント・デ・ソトマヨール(ガリシア人)、そしてフェリペ・マンリケ(アンダルシア人)は全員バスク人ではなかったけれども、親バスク派に与した。このことは、両派の戦いが純粋に民族的なものではなかったことを表している。すべての非バスク人が「ビクーニャス」を支援したわけではない。ビクーニャスの攻撃はポルトガル人に対しても向けられたはずである。ポルトガル人たちはコレヒドールのフェリペ・マンリケ(アンダルシア人)の側(バスク派)についていたからである。さらに「反感」は、1622年にドミンゴ・デ・ベラサテギ(バスク人)が突然死したとき、コレヒドールのフェリペ・マンリケが、

⁷⁹ Baldvieso, *op.cit.*, p.91, p.118.

⁸⁰ Hausberger, *op.cit.*, p.8.

⁸¹ Arzáns de Orsúa y Vela, *op.cit.*, pp.328-332.

裕福なベラサテギ未亡人クララ・ブラボ・デ・カルタヘナと結婚したとき浮上した⁸²。冒頭でも示したように、このコレヒドールは、ビクーニャスとバスコンガドスの戦いのさなか、ビクーニャスの襲撃を受け負傷している。

III 結び

ポトシ銀鉱業の歴史的な理解においては、各事柄の発生時期や時代軸をしっかりと把握して臨むことが肝要である。ポトシ銀山の開発がはじまった時期は、スペイン植民地支配がまだ緒に就いてはおらず混乱した時代であった。社会の基層はまだ「先スペイン期」なのであった。その後、副王トレドの時代に入り1570年代後半になると、ポトシ銀鉱業の主体は「民」から「官」に移っていく。すなわちスペイン王権と私企業による官民混合事業が始まる。この時期から「事業家」としてのスペイン王権の支配はきわめて強力となった。また1580年ごろ以降、ポトシの市場経済はグローバル化し、世界経済に大きな影響をもたらした。当時のポトシにおける王権の事業としては、「ミタ原住民の割り当て」、「水銀の独占販売」、「官職（公職）販売」、「鉱山の賃貸し」など（「負債」の供与）が重要となってくる。

他方、1570年代後半以降、私企業は王権の強力な支配から逃れられなくなり、王権への急激な従属を強いられた。しかしながら、ポトシのバスク人は政財界において優位な立場を堅持した。

17世紀に入ると「負債」は雪だるま式に膨れあがり、私企業側は「返済不可能」を表明する。王権にとっては、その莫大な額の回収が急がれる事態だった。しかし私企業側は、「負債」の支払い命令に、「意図的な怠慢や不正」によって対抗する。結局、「負債」徴収の現状は据え置かれ、「ポトシ銀鉱業の進展を優先する」という共通項の下で王権と私企業は妥協したように思われる。

ポトシにおいてバスク人は銀鉱業をはじめとする経済活動に邁進し、カビルドをはじめカサ・デ・ラ・モネダや財務府などにおいて公職の多くを占有した。そうしたバスク人の活動は、イベリア半島の他地域出身者である「ビクーニャス」の反感を買い、ビクーニャスからの武力攻撃を招いた。

ビクーニャスとバスコンガドスの戦い（1622～1625年）は本質的には、民族間の戦いであった。しかし、権力者間の抗争という一面もみられた。この戦いが、ポトシ銀鉱業が停滞期に入った時点で起きていたことが重要である。今後の課題としては、ポトシ以外の新大陸各地や故郷スペイン・バスク地方との繋がりなども検討してみる必要があるだろう。

⁸² Hausberger, *op.cit.*, p.11.

参考文献

狩野美智子

1992 『バスク物語—地図にない国の人びと—』、彩流社。

クレイトン、ローレンス・A.

2000 「船と帝国—スペインの場合」、合田昌史訳、『大航海の時代 スペインと新大陸』、関哲行、立石博高編訳、同文館、167-186頁。

関哲行、立石博高

2000 『大航海の時代 スペインと新大陸』、同文館。

ソラーノ、フランシスコ・デ

2000 「スペイン人コンキスタドール—その特徴」、篠原愛人訳、『大航海の時代 スペインと新大陸』、関哲行、立石博高編訳、同文館、237-265頁。

高橋均

1990 「植民地ペルー、アレキパ地方のブドウ酒生産(I)—その発足の背景と経緯、労働力調達—」、『経済学季報』（立正大学）、第40巻第1号、109-157頁。

バイク、ルース

2000 「16世紀におけるセビーリャ貴族と新世界貿易」、『大航海の時代 スペインと新大陸』、関哲行、立石博高編訳、同文館、133-166頁。

真鍋周三

2006 「スペインの地域と国家—バスク・ナショナリズムの台頭とその変容をめぐる—」、兵庫県立大学EU研究会における研究報告。

2011 「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究—ポトシ市場経済圏の形成—（前編）」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、京都外国語大学、No.11、57-84頁。

2012 「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究—ポトシ市場経済圏の形成—（後編）」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、京都外国語大学、No.12、1-31頁。

2015 「16世紀ペルーにおけるタキ・オンコイの政治・社会的背景をめぐる試論」、『ラテンアメリカ・カリブ研究』、第22号、39-54頁。

Arzáns de Orsúa y Vela, Bartolomé

1965 *Historia de la Villa Imperial de Potosí*. Edición de Gunnar Mendoza y Lewis Hanke, 3 tomos, vol.1, Providence Rhode Island: Brown University Press.

Bakewell, Peter

1984 *Miners of the Red Mountain: Indian Labor in Potosí, 1545-1650*. Albuquerque: University of New Mexico Press.

Baldivieso, Valentín Abecia

1988 *Mitayos de Potosí en una economía sumergida*. Barcelona: Tecnicos Editoriales Asociados.

- Baranda, Tello Mañueco
2006 *Diccionario del nuevo mundo, todos los conquistadores*. Valladolid: AMBITO Ediciones.
- Brown, Kendall W.
2012 *A history of Mining in Latin America from the Colonial Era to the Present*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Cañete y Domínguez, Pedro Vicente
1952 *Guía histórica, geográfica, física, civil y legal del Gobierno e Intendencia de la Provincia de Potosí*. Potosí: Editorial Potosí.
- Capoche, Luis
1959 *Relación general de la Villa Imperial de Potosí*. Biblioteca de Autores Españoles, vol.122, Edited by Lewis Hanke, Madrid: Ediciones Atlas.
- Crespo Rojas, Alberto
1997 *La guerra entre vicuñas y vascongados, Potosí 1622-1625*. Sucre: Universidad Andina Simón Bolívar.
- Cutillas, Pedro Martínez
2006 *Colonial Panama: History and Images*. Barcelona: EMMSA.
- Choque Canqui, Roberto
1993 *Sociedad y economía colonial en el sur andino*, La Paz: HISBOL.
- Garavaglia, Juan Carlos
2000 “Plata para el Rey. Tecnología y producción en el Potosí colonial.” en *Potosí plata para Europa* por compilación de Juan Marchena Fernández, Sevilla: Universidad de Sevilla/Fundación EL MONTE, pp.125-140.
- González Ochoa, José María.
2004 *Atlas histórico de la América del descubrimiento*. Madrid: Acento Editorial.
- Hausberger, Bernd
2013 “Paisanos. La etnicidad de los vascos en Potosí, c. 1600-1625.” *Caravelle* (Universidad de Toulouse), no.101, pp.173-192.
- Helmer, Marie
1960 “Luchas entre vascongados y ‘vicuñas’ en Potosí.” *Revista de Indias*, XX, núm.81-82, Madrid, pp.185-195.

Julian, Catherine J.

1997 “Las lagunas de Potosí en tiempo de don Pedro de Lodeña: documentos del Archivo de Indias.” *Historia y Cultura*, Vol.24, pp.13-53.

Kintana Goiriena, Jurgi

2002 “La “nación vascongada” y sus luchas en el Potosí del siglo XVII. Fuentes de estudio y estado de la cuestión.” *Anuario de Estudios Americanos*, Tomo LIX, No 1, pp.287-310.

Mendieta Pacheco, Wilson

1995 *La acuñación de monedas en Potosí*. La Paz: Cima.

Mendoza, L. Gunnar

1953 *Guerra civil entre vascongados y otras naciones de Potosí. Documento del Archivo Nacional de Bolivia (1622-1641)*. Potosí.

Moore, John Preston

1954 *The cabildo in Peru under the Hapsburgs: A study in the Origins and Powers of the Town Council in the Viceroyalty of Peru 1530-1700*. Durham, N.C.: Duke University Press.

Numhauser, Paulina

2005 *Mujeres indias y señores de la coca, Potosí y Cuzco en el siglo XVI*. Madrid: Cátedra.

2012 “Un asunto banal: las luchas de vicuñas y vascongados en Potosí (siglo XVII).” *Revista Illes Imperis*, 14, pp.113-138.

Robins, Nicholas A.

2011 *Mercury, Mining, and Empire: The Human and Ecological Cost of Colonial Silver Mining in the Andes*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.

Varela, Consuelo

2000 “El magnetismo de Potosí. La Babilonia americana.” en *Potosí plata para Europa* por compilación de Juan Marchena Fernández. Sevilla: Universidad de Sevilla/Fundación EL MONTE, pp.175-187.